

第76話 (61頁) 細い糸

ある人が糸つむぎの女の人に細い糸を注文しました。糸つむぎの女の人には細い糸をつむぎましたが、注文した人は、その糸ではだめだ、いちばん細い糸がひつようなのだと言いました。糸つむぎの女の方は言いました。

「これが細くないというのでしたら、こちらのべつのもんですね。」

そして、女の方は何もないところを指さしました。男は、見えない、と言いました。糸つむぎの女の方は言いました。

「見えないのは、糸がほんとうに細いからで、わたし自身も見えないのです。」

ほかものはおおよろこびして、その糸をさらに注文すると、それにお金をしはらいました。

「話は分かりやすい。でも、何を伝えようとしたのか、そこが分かりにくいよ。」

「確かに。目に見えない糸を紡ぐなんて、実際にはあり得ないからね。」

「客の注文は『いちばん細い糸』。困った末に糸紡ぎの女性は空間を指して『わたし自身にも見えないのです』と説明する。」

「半分ウソ、半分正直で、糸なんかないと告白しているようなものなのに、客はそうとは気づかず、納得してもっと注文する。」

「トルストイもあきれている。客はそれまでは『ある人』だったのに、ここで『ほかもの』と呼び方が一変する。大喜びしてお金まで払ったのでは、馬鹿者の極みだ。」

「大体、何のために必要だったのか。それも、奇妙な印象に輪をかけている。」

「客の男も、引っ込みがつかなくなったのでは。男って意地っ張りで見栄っ張りだから。」

「糸紡ぎの女性は、濡れ手に粟だけど、こっちも引っ込みがつかず、お金は受け取るしかなかったのかな。」

「私たちが生きていくうえで大切なものこそ目に見えない。そう示唆しているとは考えられないだろうか。」

「うーん。この話からそこまで読み取るのは、無理がある気がするなあ。」

「アンデルセンの『はだかの王様』を連想した。ペテン師が、この服は愚か者には見えませんと、王様をそそのかすのだが、純真な子どもたちが見抜いてしまう。」

「グリム童話にも、糸車を使う娘が出てくる。『ルンペルシュティルツヒェン』では、藁から金を紡ぎ出すように、『糸くり三人女』では一晩で部屋いっぱいの麻を紡ぎ終えるように、それぞれ迫られる。」

「ただ、アーズブカの話とは結びつかないよ。想定された糸は麻、綿、絹のどれか？とか、糸車の歴史や形にも心ひかれるけど、ね。」